# 武神のお気に入り

行雲流水

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神様転生をした女オリ主が川神学園に入学しましたとさ。

# 目　次


第一話：川神学園 ―― 1
第二話：霧夜来訪 ―― 10
第三話：決着 ―― 19
第四話：変化 ―― 27
第五話：仕合い ―― 34

# 第一話：川神学園

穏やかな春風が教室の窓のカーテンを揺らし、差し込む陽の光は教室内を明るく照らす四月。四限目の授業終了のチャイムから数分、我がクラスである二年C組の教室は大半の腹減り生徒たちが勢いよく食堂を目指し、残っている面々が各々机の上に持参した弁当を広げている。

「窓から美少女登場っ！」

言葉通りに窓から一人の少女が現れると『きゃあ』と沸き立つ黄色い声と『おお』と鼻の下を伸ばしたクラスの面々に手を振り余裕の対応をしながら、私の机の目の前に立ちにいっと年相応の笑顔を浮かべて獲物を見定める。

「渡しませんよ、川神先輩」

私の弁当に伸びた手を払いのければ、彼女は顔をむっとして睨み頬を膨らます。美少女と自称したように彼女は寸分たがわぬ美女である。

高い身長に鍛え上げた肢体。それらを彩る胸と尻は肉感が凄いことになっているのだから、一歳年上とはいえこの差はなんだろうと考えてしまうが、私の周囲にはそういう人が多い気がする。義姉さんに義姉さんの学友の方々は色濃い面子でありながら、みんな美人ときたもんだ。時折、理不尽な側面が現れるけれど、それも彼女たちの魅力だろう。

「えーっ！　良いじゃないかー少しくらい。お前の作る弁当上手いんだし、一口二口食べた所でそんなに減りはしないだろ？」

だというのにこの台詞。かなりジャイアニズムを発揮している。川神という名から想像できる通り武道の総本山『川神院』の次代を継ぐ人であるのに、こうも理不尽極まりなくていいのだろうか。

「確実に減ってますって。というかいつもいつも強奪しにくるなら、自分の食い扶持くらいちゃんと持参してきてくださいよ」

そう弁当なり食堂で食べる分のお金なり。とはいえ目の前のこの人は宵越しの金を持たない主義なのか、よく金欠に見舞われている。

そうなると自分のファンの子たちにサービスしながら集っているのだけれど、私の場合理不尽に奪われ見返りなど全くない。彼女の弟分というか舎弟である二年Ｆ組の直江くんについ愚痴を吐いてしまったことがあり、彼も不味い状況だと判断してくれたのか川神先輩に話をしてくれたようだけれども、一向に収まる気配はなく。

「ケチだなあ……こんな美少女がお願いしてるのに、なんで靡かないんだお前は」

己の容姿の良さを理解していることと、持ち前の強さから彼女は随分と漢前。その自信から行動の端々が大胆であり、今も私の顎を片手でくいっと持ち上げて顔を近づけている。

この場合、顔を赤らめて恥ずかしがるのが一般的なのだろうけれど、彼女の行動と似たことをする同性を知っている所為か、イケメンな行動をとられてもあまり心に響かない。そういえば仕事が忙しく世界中を飛び回っているその人は、元気にしているのやら。便りがないのは元気な証拠というのだし、いつものように親友を引き連れて王道を闊歩しているに違いない。

「先輩の場合お願いじゃなくて強奪ですし、私が靡かないならファンの子たちにでもお願いすればいいじゃないですか」

一瞬反れた思考を戻して目の前の美人さんを睨むと気を良くしたのか、顎に置いていた手を解き刹那で私が座っている椅子の後ろに回り込んで後ろから抱き留められる。

「それもいいが、お前を相手にするもの楽しいんだよ」

今まで居ないタイプだからからかい甲斐があると私の耳元で彼女がのたまうのだけれど、それを無視して箸を手に取り弁当に伸ばす。

「……」

しれっと胸に伸びた手がぐにぐにと揉んでいるけれど何が楽しいのやら。というよりもこの行動に慣れてしまっている私も私だけれども、慣れてしまった犯人は今頃国外で高笑いをしている気がする。

「無視するなぁ！　――樹希の不感症っ！」

黙々と箸を進める私に涙目になりながら、また窓から飛び出して行った先輩こと川神百代。武神と呼ばれて名高い彼女に、私は不感症

じゃないと心の中で文句を呟く。正面を切って言ってしまうと『手合わせ』という名のリンチというか、寝技のデパートへと誘われてしまうので絶対に言わない。

――そういえば、いつからこんな関係になったんだっけ？

ふと浮かんだ疑問に記憶を掘り返してみた。

◇

東京、柴又。鉄邸にて。

夕ご飯を終えて片づけも済ませて自室で就寝時間まで時間を潰そうと机に向かい腰を下ろしたその時だった。

「樹希、少しいいか？」

部屋に響くノックの音が二回したあと、くぐもった慣れ親しんだ声が届く。

「うん、大丈夫。――どうしたの、乙女義姉さん」

部屋に訪れ襖を引いた義姉の姿を見上げれば奇麗に微笑み手招きをする。

「取り合えず居間に行こう」

学園を卒業した義姉は大学に通う為、居候をしていた松笠にある親戚の対馬家からこちらへと戻ってきていた。椅子から立ち上がり義姉と並んで廊下を歩いて居間へと入れば、そこには養父母とその父である義祖父の姿。武者修行と称して海外へとしょっちゅう旅に出ている養父母に破天荒な義祖父がこうして一堂に揃う事は珍しく、私の面倒を見てくれるのは専ら面倒見の良い義姉であった。

「もうすぐ樹希は受験生だろう。どこか希望する学校はあるのか？」

「特に考えていないけど、家から近場の公立校に行きたいかなあ」

前世なんてものがあるお陰で勉強に関してはそこそこの自信がある。あとは目指す学校の偏差値を超えればいいだけだから、悲観はしていない。

「そうか。強い希望がないなら松笠にある私立の『竜鳴館』か川神の『川神学園』を受けてみるのはどうだろう」

「確かどっちも私立校だよね？　学費が掛かるし家から遠いしあん

まり行きたくはない、かな……」
松笠も川神も隣県であり、ここから通うには遠い場所にある。となれば義姉と同じくどこかに転がり込むしかなくなるし、私立校なら学費も高くつくだろう。
「お金の面は気にしなくていいんだ。それは親である僕たちの責任だよ。ただ乙女から話を聞くに、学校であまり上手く馴染めていないだろう？」
噂というものは好奇心もさることながら、あっという間に広がっていく。事故で両親を失い親戚の家を転々としていた私を遠縁である鉄家が養女として迎え入れてくれた。私が鉄家の養女であるというのはいつの間にか学校内で知れ渡っていたし、己の力を制御できていなかった小さい頃は突然鉛筆やらを折ってよく周囲を驚かせ『ゴリラ女』と言われ恐れられていた。小学生でありながらそれを軽く超える身体能力が備わっていたのは、私が前世の記憶を持っていたからとしか言いようがない。
生まれ変わる際、自称神さまに『作中最強の力』とやらを与えられていたのだ。
作中というからには何かの作品なのだろうけれど全く知らない作品だった。最強の力と言われ恐ろしい世界にでも生まれ変わるのかと覚悟していたけれど、まったく平和な現代社会で拍子抜けしたものだ。でもすぐに私の異常さが現れる。前世の感覚で行動を起こすと、何が違うのかよく物を破壊した。その姿を見て実の両親は私をバケモノ呼ばわりしたし、周囲の人たちの反応も同じだった。
事故で親を亡くしてしまったのは運が良かったのか悪かったのか。バケモノだと罵られ親戚中をたらい回しにされたけれど、最低限の食事と雨風を凌げる部屋は与えられていたのだから。そうして数年が経ち遠縁だった鉄家に異質な力に目を付けたのか養子として迎え入れられた。
「……義姉さん」
学校で孤立していることは黙っていて欲しいと義姉には言い含めていたのだけれど、どうやら彼女のお節介スキルが発揮したようで、

養父母に話したらしい。
「すまない樹希。だが竜鳴館か川神学園ならお前を受け入れてくれる土壌がある」
世話になっている義姉に反論など出来るはずもなく、とつとつと理由を語る義姉の言葉に耳を傾ける。破天荒な学園だから色んな人がいるし、私が目立つことはそうそうないこと。
義姉の在学中に竜鳴館体育武道祭に訪れたことがあるけれど、館長はヘリから投下された鋼鉄を拳で打ち砕くだいたり、義姉も義姉でドッチボールの競技でボールに竜を降臨させて校舎の壁を穿っていたし……。確かに私が目立つ理由は消えてしまうなあと納得して、どちらかの学園を受けてみようかという気になってくる。
「それを考えるなら竜鳴館よりも川神学園の方が合うかもしれないな」
「そうなの？」
「ああ。武道の総本山といわれる『川神院』の存在が大きいから武を示したい人間が多く集まる土地柄だし、丁度川神院の御息女も在学していると聞く」
私がきちんと鉄流を習うようになったのは中学生になってからである。小学生までは日常生活に支障が出るほど力加減が身についていなくて、そちらの方に尽力していた。
ようやく義姉や義祖父からのアドバイスで普通の生活を送れるようになり、鉄流を習ってみるかと問われたのもその頃だった。体を動かすことは好きだったし、なによりも義姉や義祖父、道場の人たちとの手合わせは楽しかったし、幼い頃は持て余していた力を自分のモノとして扱えるようになるのも嬉しかった。
中学では私が小学生の頃『ゴリラ女』と呼ばれていた事が噂で広まっていたので畏怖されていたし、自ら進んで友人を作ろうともしていなかったので友と呼べる人はほぼ皆無なので良い機会なのだろう。それならと川神学園の入学試験を受けることを決め、中学三年生の三学期に家へと届いた合格通知に家族みんなで歓喜した。
「義姉さん。ソレはあそこにお願いします」

「わかった。――しかし荷物が少なすぎじゃないか？」
腰に手を充てて溜息を吐く義姉。元からあまり荷物を置くことが好きではないのだから仕方ない。義姉の部屋は園芸の趣味が高じて花が飾っているので、寂しく感じるのだろう。
「そうかな？　最低限は揃ってるし、寮暮らしだから調理器具とかは買い揃えなくていいから助かるよ」
川神学園の近くにある寮へと入ることも決まり、春休みももうすぐ終わりという時期に荷物を運んでいるのだけれど、配送だけを頼み部屋への移送を業者さんに頼っていないのが笑える。
義姉も人並外れた力を持っているし、私も尋常でない力を発揮できるので大きな荷物があっても、二人居れば問題はない。道すがら通る人たちがこちらをちらりと見るものの、あまり驚いていない様子が新鮮だった。
「なにかあれば直ぐに言うんだぞ？」
「心配しすぎだよ、乙女義姉さんは」
雑談を繰り広げながら入寮している人たちに挨拶をしたり、近所の地理を把握したりすれば入学式は直ぐにやって来た。
真新しい制服に袖を通し短いスカートに気を取られながら、白がベースだから汚れないように気を付けねばと感じつつ、通学路を進み多馬大橋に差し掛かると学園への合流地点である為に、多くの川神学園生が歩いてた。
別名変態の橋と呼ばれているそうで、奇行に走る人が多く居るらしい。春だというのに冬物のコートに身を包み、素足に革靴、その上はスネ毛が見えているので短パンかパンツのみの着用なのか。とにかく関わらない方が良いなあと視線をそらして学園を目指そうと前を向いた時。
「失礼、川神百代殿とお見受けするっ！」
「いかにも」
変態さんが居た別方向から張りのある低い声がこだまし、無意識に声に反応して視線を向ける。そこに居た白い道着を着込んだ男性に相対するのは、川神学園の制服を着た一人の女子生徒。背が高く長く

伸びた黒髪に意志の強そうな瞳。美人さんは見慣れているけれど、これまたその人たちに引けを取らない美人さんで。

――この人……強い。

道着を着込んだ男性ではなく、川神学園の制服を着た女子生徒に対して抱いた正直な気持ちだ。義姉や義祖父、義姉の紹介から知人となった竜鳴館の館長やその弟さんに娘さん。強い人たちと手合わせをしてきてそれなりに強いと思っているけれど、橋の中央で相対しているこの人の実力も凄いものを感じる。世界は広いねえと足を止め、入学式までの時間には間に合うかと腕時計で確認。

「俺は――……、拳法家だ」

一瞬吹いた強い風に男性の名前は聞き取れなかったが、どうやら川神院の総代である川神鉄心さんとの手合わせを望んだけれど、孫である川神百代さんとの手合わせに勝たなければならないルールが存在するそうで。

学園生と聞いていたのでこの場で待っていれば、そのうち訪れると川神院の人たちから聞いたそうだ。朝から賑やかだなあと目を細めていると、川神さんとやらは仕合を受けるようで、一緒に登校していたであろう仲間内の数人で交通整理まで始め、河原へと二人降りていく。

一定の距離を取って一礼。さてどちらが先に仕掛けるかとのほほんと橋の上から見下ろしていると、私の周りにも見物客が多く押し寄せているけれど大半は学園の生徒。

わいわいと騒ぐ人だかりに紛れ、様子を眺めていると一瞬で勝敗は決まり、男性が川神鉄心さんへと挑戦する権利を失っていた。奇麗に一礼した後、携帯電話を手に取りどこかに連絡を取り始めた川神さん。瓦の片隅で伸びている男性への対処なのだろうか。救急車なのか警察を呼んだのかは分からないけれど、あのまま放置するのはよろしくないよなあと納得。

「また川神さんの勝ちかあ」

「強いなあ」

「きゃーっ！　モモちゃんカッコいいー!!」

感嘆の声と黄色い声が入り交じり、仕合も終わったせいか学園を目指す為に人だかりが解かれ始めた。その波に乗って私も学園へと足を向けて入学式へ参加するために体育館へと歩を進めていると、人力車が自転車並みのスピードで車道を走り去っていた。一瞬ではあったけれどメイド服を着込んだ女性が曳いていい気がするし、それと一緒に男性の高笑いも聞こえていたような。私服ならば学生ではなく保護者なのだろうか。まだ入学式までは時間があるし、保護者の来場時間はズラしていたハズである。時間に遅れないようにと早めに来たのかも知れないし、今日だけの光景だろう。

そんなこんなで入学式が始まり学長や生徒会に来賓者からの挨拶を聞いていれば、いつの間にか終わりを告げていた。

編入されたクラスへと赴き学園内での主なイベントやルールについての話が始まる。宇佐美と名乗った我が一年E組クラスの担任教師は随分と気だるそうにしているけれど、仕事はきっちりこなしているようだ。正直、口うるさい教師よりもこういう人の方が助かる。

「そんじゃ、自己紹介よろしく。先生は適当に聞いてるから、出席番号順で」

あいうえお順で決められているので『あ』から始まる人は唐突な教師の提案にしどろもどろしつつ、名前と出身中学校を告げて無難に趣味を述べていた。自分の順番になるにはもう少しばかり時間があるから、なにかないものかと頭を捻る。そうこうしているうちに前の席に座る子に順番が回ってくると、勢い良く立ち上がり赤みがかった茶色のポニーテールを揺らして背を伸ばして声を上げた。

「川神一子っ！　趣味は決闘に鍛錬っ！」

そう言い切れる当たり川神という街は変わっている。そもそも決闘って法律で禁止されているというのに、彼女の言葉に誰も何も突っ込まず黙認されているのは学園内だからなのだろうか。

そういえば朝に出会った川神百代さんと同じ苗字だけれど、姉妹なのだろうか。まあ川神という地名だし、この辺りに根付いている家名なのかもと結論付けて、まだ続いている自己紹介に耳を傾ける。

「勝負ならいつでも受けるわっ！」

自信満々の明るい声で言い切る川神さんに続いて、私の順番が回ってきたのでゆっくりと席を立って前を向く。

「東京からこちらへと参りました鉄樹希（くろがねいつき）です。まだ地理に慣れずご迷惑を掛けることがあるかもしれませんが、これから三年間よろしくお願いします」

とまあ無難に済ませた。鉄と名乗った瞬間少し教室内がざわついたような気もするが『はい、次―』と宇佐美先生の声でバトンは後ろの席の人へ。

ふと気づいたのだけれど彼ら彼女らが名乗る家名は武家の名前が多い。土地柄なのか、それとも家族が言っていた『川神は武を極める人が多く集まる』という質の為なのか。どちらにせよ朝の光景を踏まえると、刺激的な日常を送れそうだと窓の外に目を向ける。

――川神学園に入学。

その選択肢を選んだ私が武神と呼ばれる少女に懐かれることに、そう時間はかからなかった。

# 第二話：霧夜来訪

入学式に新入生向けのオリエンテーションを終えてから約二週間。地元の人間が多い所為なのか中学からの顔なじみのグループがいくつか出来上がっており、その輪の中に入るのも流石に無粋だよなあと遠い目になる。

「今から人間測定を行うぞー」

いつものように気怠そうに教室へとやって来た宇佐美先生の一言で、ゾロゾロとクラスメイトが立ち上がり更衣室へと向かい着替えを始め、体育館へと移動する。そこには他の一年生のクラスもいるので、体育館は多くの生徒でごった返している。

適当にペアを組んで身長体重に握力や背筋に他、いわゆる身体測定の項目と同じなのだけれど『人間測定』と銘打たれているので、人間の度合いをはかるというよく分からない難解なものまである。体操服に着替えて体育館へと入れば宇佐美先生からの雑な説明を受ける。

「鉄さん、ペア組みましょうよー」

にっこりと無邪気な笑みを浮かべ私に振り返りペアをもうと声を掛けてくれたのは川神さんだ。

「了解」

有難い申し出に快く返事をして、空いている所へと並びさっくりと身長測定を終える。

外様組の私をこうして彼女が気にかけてくれるのには一応の理由がある。朝と夕に体力づくりの為にランニングをしているのだけれど、偶々彼女に出くわしそこから川神市内おすすめのランニングコースを教えて貰ったことが切っ掛けだ。

あともう一つが、仲の良かった幼馴染たちと完全に分かれてしまい、クラス内では川神さん一人になってしまったことも大きいのだろう。彼女には申し訳ないがぼっちにならなくて済んだので、こうして声を掛けてくれるのは正直助かる。

「おお、凄い」

「えへへー。鍛えているから力には自信があるわ！」

女子の全国平均を軽く超えた握力数値をたたき出した川神さんに感嘆の声を漏らすと、彼女は嬉しそうに笑って答えてくれた。そうして私に差し出された握力測定器を受け取り、ごくりと喉を鳴らす。過去に失敗をしている所為でどうにも苦手意識がある。というのも力加減が上手くできていなかった小学生時代の体力測定で、機器を壊したこと数度。

周りからは異様な目で見られるし保護者が呼び出されるはで大変だった。中学生になる頃にようやく自身の力加減を身に着けそういうことはなくなったものの、全力を出せないまま周りには偽るしかないことに、少しばかりの罪悪感を覚える。とはいえ測定器を壊してあんな目で見られるよりはマシだけれども。軽く、かるーくと念じながら持ち手を握り、少しばかりの力を加えた。

「鉄さんもすごいじゃないっ！」

測定器のデジタル表示をのぞき込むと自分の事のように喜ぶ川神さん。

「ありがとう。でも、川神さんほど出なかったから」

大したことないよと苦笑いを浮かべながら全国平均値より少し上の値を用紙に書き込んだ。そんなこんなで一通りの測定を終え更衣室で着替えを済ませると、いつのまにか纏められていた全員の測定結果が掲示板に張り出され。競うことをモットーにしている学園らしく、学力だけではなくこういうことも公開して発破を掛けるようだ。結果を確認しようと人だかりが出来ており、流れに身を任せなら前へと進む。

「川神さんと鉄さんがツートップかあ」

「体育関係は二人に期待だね」

「ええ、まかせて！」

そうして見える所までもう少しというところで、掲示板の前に集まったクラスの女子の会話が聞こえてきたのだった。

◇

人間測定を終えて通常授業となっている四限目がもうすぐ終わるという頃。

少しざわついたグラウンドに何事だろうと視線を向けるけれど、よくわからないまま昼休み突入のチャイムが鳴り響く。ご飯を済ませて持参した文庫本でも読むかと、いそいそと朝に作った弁当を取り出して机の上に置き包みをあけ、箸を取る。

「いただきます」

命を頂いたことに感謝、農家の方に感謝、食べられることに感謝と手を合わせる。孤児だった前世と今世も幼い頃はあまり家庭に恵まれなかった為なのか、食い意地が張っているのはご愛敬。

こちらへと寮住まいになる際に買ってもらった弁当箱は曲げわっぱ。高校生の弁当箱にしては高級品であるが、食べるなら美味しい方が良いだろうと選ん買ってくれた家族には感謝しかない。そうして箸を進めること数度。どたどたとした様子の廊下に何事かと顔を向けたその時。

「めちゃくちゃ美人三人がこっち向かって歩いて来るぞっ！」

かなり興奮した様子でクラスの男子が教室へと駆け込んできた。その声に反応して教室に残っていた男子生徒が廊下を見ようと窓へと顔を出すと、その姿が確認できたのかどんどんと盛り上がっていく男子。

「うわっ！　金髪美人に銀髪の人までいる！　もう一人の人もめっちゃいい感じじゃね？」

「すげーなあ。三人ともキレーなおねーさんじゃん。あとおっぱい大きい」

盛り上がる男子と、その声を聴いた女子の温度差が半端ない。まあ思春期ど真ん中の男子諸君の興奮は理解できなくもないけれど、心の中に留めておけばいいのにと思ってしまう。

「こっち来るぞっ！」

「うひょー！」

男子たちのボルテージが最高潮だなあと、私には関係ないことだと咀嚼した瞬間。

「あ、いたいた。――サワディーカー！　樹希！」

聞き覚えのあるその声にそこは私の名前ではなくＨＩＲＡＳ〇Ｗ

Aなのではと心の中で一人突っ込みを入れながら、知り合いが突然学園に現れるという驚きの展開に喉にご飯を詰まらせる所だった。
学園関係者でもないのに堂々と教室へと入ってくるのだけれど、窓に集っていた男子たちが鼻の下を伸ばしまくっている。そんな様子に目もくれず私の下へとやって来て、片手を腰に当ててポーズを取る彼女の姿は以前に見た時よりも綺麗になっていた。
「エリカさん、どうしてここに」
「乙女さんに貴女の様子を時折で良いから気にしてやってくれって言われてたのよ。それで川神に用があったんだけれど、仕事の合間に丁度時間が出来たから、来てみたってワケ。感謝しなさい」
学生時代から随分と伸びた金糸の髪を揺らしながら、赤い薔薇を出す。乙女義姉さんの話によると在学中にもしょっちゅう薔薇をどこからともなく取り出していたそうで、彼女曰く『お嬢の嗜み』らしいのだけれど何故そんな芸当が出来るのやら。
ポーズを決めているエリカさんの後ろでは申し訳なさそうな顔をした良美さんと瀬麗武さんの姿。学校卒業後の数年後にエリカさんの第三秘書と第八秘書の座に就いたそうで、いつも一緒に行動し世界を飛び回っている。
「あ、ちゃんと学園には許可を取ったから」
首から提げている許可証をぷらぷらと見せてくれた。それなら問題はないだろうとエリカさんと視線を合わせる。
「本当、真面目な乙女さんの妹らしいわね」
座ったままだと失礼なので、椅子から立ち上がり一礼する。
「義姉さんほど真っ直ぐじゃあありませんよ、私は。――お久しぶりです、エリカさん、良美さん、瀬麗武さん」
「ええ、久しぶり」
「ごめんねえ樹希ちゃん。エリーったらいつも突然だから……」
周囲の状況を一番理解している良識人である良美さんが、目を細めながら私に謝ってくれるのだけれど、エリカさんに振り回されて尻拭いをしているのは彼女なので謝らないで欲しい。小さく頭を振って気にしないでくださいと伝える。

「久しぶりだな、樹希。少し背が伸びたんじゃないか？」
瀬麗武さんに以前に会ったのは何時だったか。ぐりぐりと頭を撫でられる姿を、エリカさんと良美さんが苦笑しながら見ているので、少々恥ずかしい。
「あまり実感はありませんが……。あ、瀬麗武さん、また時間があれば手解きお願いしてもいいでしょうか？」
鉄の家で義祖父や義姉相手に組手をしていたのだけれど、彼女も強いので私の相手をしてもらっていた。気兼ねなく全力を出せる人の数は限られるので、瀬麗武さんとの手合わせは楽しい。仕事が忙しいらしく回数は減ってきているけれど、このまま疎遠になってしまうのは勿体ないのでアピールは忘れない。
「わかった。その時は鉄も呼んでくれると有難い」
「了解です」
彼女は暇を見つけて鉄の道場へと時折顔を出しては乙女義姉さんに挑戦者として挑んでいるそうなのだけれど、義姉も忙しく道場へ顔を出す機会が減っている。二人の仕合をみるのも勉強になるので、どうにか時間を見つけて引き合わせたいけれど、上手くことが運ぶのやら。
「奇麗なねーちゃん発見っ！」
「お姉さまっ！」
どこからともなく現れた川神先輩が教室へと現れ、その姿を見た川神さんが勢いよく椅子から立ち上がり彼女の下へと駆け寄った。
「――へえ。合格」
川神先輩を上から下へと舐めずりをするように視線を向けたエリカさん。嗚呼、この人の悪癖が発動したなあと、良美さんと二人して遠い目になる。でも川神先輩も同じようなことを言っていたので、どうやら彼女もエリカさんと同類のようだ。この邂逅はどんなことになるのやら。エリカさんの気は強いので喧嘩にならなきゃ良いけれど。
「ねえ貴女、私のモノにならない？」
二人が対面し、エリカさんが突拍子もないことを言い放つけれど、

その言葉はあながち冗談でも何でもなくエリカさん個人で『ブルーアイズ』なるものを設立しており、彼女専用のメイドや執事が存在する。
仕事内容は多岐に渡るそうで、書類仕事に私生活の世話に夜のお供までとなんでもござれ。エリカさんの言葉を聞いた良美さんが頭を抱え、瀬麗武さんは無表情。とりあえずこのやり取りを静観するようだ。
「貴女のモノになるのも悪くはないですが、私は攻め気質なので飼われるより貴女を飼いたい」
「ふふっ。気に入ったわ」
身長差が少しあるので川神先輩が見下ろす形になっている。エリカさんはハーフなのでそれなりに背が高いというのに。先程よりも半トーン低い声で川神先輩がそんな台詞を吐き出して、エリカさんの腰に手を回そうとしたその瞬間。
「すまないな、秘書の立場だが護衛役も兼ねているんだ」
「お」
ぱしっと川神先輩の伸びた右手を払いのけたのは、瀬麗武さんで。
「へえ、強いな」
「お、お姉さま?」
川神先輩の口がにいっと伸びて一瞬にして好戦的な顔になると、瀬麗武さんもその変化を感じ取ったようでエリカさんの前へと身を出していつでも護れる体勢をとった。ごくり、と息を呑んだのは誰だったのだろう。自分なのかクラスメイトの誰かなのか。一瞬で教室が張り詰めた空気に変わり、誰も身動きを取ることが出来なくなる。
「こりゃーー!! モモっ! 客人になにをしとるかっ!」
「あ、ジジイっ! 良い所だったのに何しに来たっ!」
ヤバいと誰しもが背に汗をかいた瞬間、状況を変える人が現れた。学長の一声で張り詰めていた空気が霧散して、ほっと息を吐く。
「ばかもんっ! どこでもかしこでも喧嘩なぞ売るんでないわっ!」
「えー、なんだよつまらん。せっかく強そうな人を見つけて勝負を吹っ掛けようとしたのにっ!」

「阿呆、客人に勝負を吹っ掛けるヤツがどこにいるんじゃ！　――孫が迷惑を掛けてすまんのう」
そこに居ますよ学長とは声には出せず。川神先輩と話していた学長はエリカさんの方へと向き直り頭を小さく下げた。
「いいえ、学長。元気のいい子は好きですし、こういうのは如何でしょう？」
「うん？」
「川神学園では『決闘』システムがあると聞き及んでおります」
にっこりと笑いエリカさんがビジネススマイルを浮かべて学長と話している。その横で川神先輩が少し驚いた様子をみせるけれど、勝負できる場が整い始めていることに気が付いて嬉しそうな顔をしているのだから、手合わせや戦うことが好きなのだろう。
「よく知っておるのう、そうじゃな」
「私たちは生徒ではありませんが、彼女との勝負引き受けてもよろしいでしょうか？」
「お前さんたちがそういうならかまわんが、いいのかね？」
「ええ。勝負を受けるのは私の護衛である彼女ですが、問題は？」
エリカさんが瀬麗武さんの方に視線を向けると、小さく頷いた。どうやらこの勝負、成立しそうで周りの人たちも浮足立っている。そしてこの騒ぎを聞きつけたのか、一年生以外にも二年生や三年生が様子を見に来ており、どんどんと人だかりができる廊下。
「ふむ、無いのう。一応、レプリカの武器が用意できるんじゃが勝負方法は？」
「銀ちゃん、どうする？」
「徒手でかまわないが……彼女は？」
「私もそれでかまいません」
先程とは裏腹に真面目な様子で勝負師の顔をしている川神先輩。背を伸ばし闘気を溢れさせ、早く始めようと言わんばかりだ。
エリカさんと学長が暫く話し合ったあとグラウンドへと移動すると、校内放送で決闘が始まるとアナウンスが流れた。私も三人と一緒に移動して、エリカさんと良美さんの横へと並ぶ。他にも川神さんを

はじめとした野次馬が多数に、料理部が食べ物を出したり賭けが始まっていたりと随分と自由だった。
「客人に時間がないそうでの。三分一本勝負、双方異論は？」
学長と体育教師のルー先生がこの勝負の見届け人のようだった。それと保険医の人が控えている。
「ありません」
「ないな」
「あ、そうそう。私のモノになるのは無理だそうだから、銀ちゃんが勝ったら貴女の立派なそのおっぱい揉ませてね」
エリカさんのおっぱい星人っぷりは相変わらずらしい。大きくても小さくてもどちらも等しく尊いもので、『乳』と文字に書いて興奮すると豪語している猛者である。
「おい、霧夜。真面目な勝負事にそんなものを――」
「――かまいませんよ。私が勝ったら貴女のおっぱいを揉ませて下さるのなら」
瀬麗武さんの言葉を遮った川神先輩もどうやらおっぱい星人のようで。グラウンドや校舎の窓から顔を覗かせている男子たちが大喜びしている。
「あら私の胸の価値は高いわよ。そうねえ……」
少し考えるそぶりを見せて良美さんの右腕を引き前に出しすエリカさん。
「この立派なバスト八十九を貴女の気のすむまで自由にしていいわっ！」
「おおっ！」
エリカさんの急な発言に嬉しそうな顔をする川神先輩。瀬麗武さんの言葉をスルーし良美さんの気持ちもスルーしているんだけれど、エリカさんなので止められる人がいない。
「え、えええええええっ!?」
完全な流れ弾が命中した良美さんの驚いた声がグラウンドに響き渡るのだった。
――うらやましいのう。

小さく呟いた学長の声が聞こえた気がした。

# 第三話：決着

流石に学園関係者以外との『決闘』は不味いと判断されたらしく、名目は『組手』になっている。おそらく学長とエリカさんの間で決めたのだろう。

「ひどいよ、エリー……」

瀬麗武さんが負ければ胸を差し出さなければならなくなった良美さんが嘆いているけれど、助けることが出来ない。余計なことを言ってしまえば私が彼女の代わりを務める可能性が高くなってしまう。

勝てばそうなることはないし川神先輩の胸を堪能したエリカさんの機嫌は良くなるだろうから、手合わせをする瀬麗武さんには頑張って欲しい。というよりも川神先輩は瀬麗武さんに勝てるのだろうか。松笠海軍を司令官を務め『松笠の古狼』と呼ばれる父を持つ彼女が負ける姿をあまり想像できないが。

「そんなにに心配しなくても大丈夫よ、よっぴー。銀ちゃんは強いんだもの負けるなんてありえないでしょ。――それよりもあのたわわな実を好きにできるだなんて……ふふっ」

入学式の朝、河原で見たあの光景。一瞬で手練れの武闘家を沈めた川神先輩を侮ることは出来ない。エリカさんはその事実を知らないので無類のおっぱい好きが高じてテンションが上がっているけれど、負けた場合には良美さんが犠牲として支払われなければいけないのだけれど、いいのだろうか。瀬麗武さんの実力を考えれば万が一ということは、そうそうないだろう。しかし、どうにも不安がよぎる。

「両者、前へ」

審判はルー先生が行うようで学長はその横で控え、静かに佇んでいる。学長も随分と破天荒なことをする。

いつもの空気から一転、一瞬にしてソレが変質した。穏やかな春の陽気から、真冬の冷たい氷の中に閉じ込められたような錯覚。それが二人から溢れ出る闘気なのだと理解するには、少しばかり遅れてしまった。学び舎でそうそう体験することのない雰囲気に、騒がしかっ

た周囲もその場に止まり一斉に押し黙ってしまった。
「川神流、川神百代」
「橘瀬麗武」
すっと片足を肩幅程度に後ろに引く瀬麗武さんと、だらんと両腕を下げ構える様子のない川神先輩。
「三分一本勝負、二人ともいいネ？」
右左と視線を動かしながら確認を取り右手を上げたルー先生が大きく息を呑み込めば。
「レディー、ファイっ！」
ルー先生の大きな怒号がグラウンドに響き渡り、試合開始の合図を告げる。
「っふ！」
劈頭を切ったのは瀬麗武さんだった。川神先輩との合間を詰めて射程範囲へ踏み込む直前脇を締め利き腕を絞り、有効打撃範囲内に入ったのも束の間、利き腕を限界まで引き絞った弓を解き放つがごとく真っ直ぐ突き出す。
「おおっ！　――では、こちらからもっ！」
いとも簡単に瀬麗武さんのストレートを片手で防いだ川神先輩は喜色満面になっている。入学式の日の朝だけでなく街の不良からも絡まれている場面も見たことがあるが、こんな顔を見るのは初めてだ。
「鋭いな。今のは危なかった」
お返しとばかりに川神先輩が間合いへと踏み込んで放ったストレートを、寸での所で避けた瀬麗武さんは落ち着いた声色で返す。
まだどちらも本気は出しておらず様子見といったところなのだろう。お互いの実力を測りながら、目の前で繰り広げられている攻防を楽しいでいる。この仕合いを見ている学長とルー先生も驚いている様子で、なにやら言葉を交わしている。
「銀ちゃんの強さは理解しているけれど、彼女も強いわね」
「うーん……二人とも凄すぎて分からない……」
「ま、よっぴーは分らなくても問題はないでしょ。いざとなれば私

が守るんだし」
「嬉しいけど、無茶はしないでねエリー」
ああんよっぴーは可愛いわねぇと仕合そっちのけで、良美さんの腰に手を回して薔薇をどこからか出して手に取ってポーズを決めるエリカさん。そしてその光景を見て沸き立つ男子生徒がちらほらと。エリカさんの発言からこの展開になったのだけれど、それとこれとは別問題なのだろうか。時折こちらへとくる衝撃波に驚きつつも、実力者同士の仕合いは参考になるものが多いと、目の前で怒涛の展開をじっと見つめる。
「というか、この学園を選んで良かったわね、樹希。　――って、聞いてないし」
「集中してるねえ」
「この私の言葉を聞かないなんて、良い度胸してるわ、ねっ！」
「痛い……エリカさん、なんで怒っているんです？」
唐突に飛んできた膝蹴りに意識を戻され、腕を組んだ不満顔のエリカさんにストレートに聞いてみた。
「あのねえ、私が話しているんだからちゃんと話を聞きなさいな」
「すみません、あの二人の仕合いを見ているのが楽しくて」
後ろ手で頭を掻きながら未だ繰り広げられている拮抗した攻防に目が離せない。
「ああ、もう。――樹希、見ながらでいいから私の話を聞きなさい。銀ちゃんに勝てる要素はあるかしら？」
拮抗はしているものの川神先輩の方が押し始めており、瀬麗武さんは防衛に専念することが多くなってきている。時折、反攻はしているもののどれも有効打には至っていない。川神先輩の強さに驚きつつ、その川神先輩の相手を出来ている瀬麗武さんも凄い。
「今のままなら時間切れか川神先輩の方が勝つ可能性が高いかと。何か一手欲しい所ですが……」
残り時間は一分ほど。このまま何も状況は変わらないまま終わってしいそうな予感がする。もしくは余力のありそうな川神先輩が、最後の最後で大技を出してきそうな予感もするが、どうなってしまうの

かは勝敗が付くまでは分らない。
「なるほどね……それなら」
「エ、エリー？」
大丈夫よ変なことはしなからと不安げな声を上げた良美さんに言葉を返すエリカさんは、すうと大きく空気を吸い込む。
「銀ちゃん、眼鏡を外しなさい！」
グラウンドに響く一切を引き付ける声。邪魔が入ったと言わんばかりに激しく繰り広げられていた仕合いが一瞬停滞し、二人が凄い形相でエリカさんを睨む。常人を逸している二人の視線に驚き息を呑んだ良美さんが、私の制服を掴んで後ろに隠れた。
「霧夜、邪魔をするな！」
「……」
「いいから、業務命令～」
エリカさんは二人からの殺気に充てられている筈なのに、随分と涼しい顔で続けて声を上げた。仕事中に抜け出している手前、瀬麗武さんは業務中である。直属の上司からの言葉には逆らえず、かなりの距離が空いていたというのにひょいと跳躍して私の下へとやって来た。
「頼む」
「お預かりします」
そう言い残して元の位置に戻った瀬麗武さんは一足飛びで川神先輩へ技を出した。
「はあっ！」
「――おっ？」
先程よりも瀬麗武さんの技の切れが良くなっており、川神先輩の笑みの質が変わり、視線が鋭くなっている。
「銀ちゃんってちょっとズレてる所があるからねえ」
「眼鏡を掛けていると知的に見えるからって、視力悪くないのに度付きの眼鏡を選んじゃったもんねえ……」
なんだか痛いものでも見るようなエリカさんと良美さんの視線が件の人へと向けられている。どうやら眼鏡の所為で、そこかしこで何かに躓いたりしているそうで周囲を呆れさせているそうで。瀬麗武

さんの視力はかなり良かったはずなので、二人の言葉は言わずもがな。
今日久しぶりに再会して、伊達眼鏡だろうと思い込んでしまっていた為に何の疑問を抱いてなかった。お茶目な人だなあと目を細れば、お互いの射程範囲で刹那の攻防を繰り広げていたというのに、距離を取った。
「川神流――……無」
「タイムアーーーップっ!!」
「はあああああああああああああああああああああああああああああああっ!?」
おそらく最後の一手となるはずだった川神先輩の一撃は繰り出されることはなく、ルー先生の声によって止められて大声を出す先輩。
その様子を見ながらふうと深い息を吐いた瀬麗武さんは、珍しく汗だくになっているのだから激闘だったことが伺える。　ただ瀬麗武さんの相手だった先輩は制服を汚していないし、汗だってかいていない。不満の声を上げながら物足りないとルー先生と学長に抗議していた。
「なんで一番良い所で止めるんだよっ！　師範代、ジジイっ!!」
「時間切れじゃよ、モモ」
「強敵に出会えたからといって遊んでいたモモヨが悪いネ。この勝負、引き分けダヨ」
「あーっくっそっ！　もう一度だ、もう一度っ!!」
「我が儘を言うんでない、モモっ！　そもそもお客人が時間がないからといって三分一本勝負と言ったんじゃ。ほれ、開始位置に戻らんか！」
三人の会話を聞くに、どうやら川神先輩は手を抜いていたようだ。あれで手を抜いていたってどういうことだと驚きながらも、瀬麗武さんの負けた所なんて正直見たくはないので引き分けで良かった。開始位置へとそれぞれ戻り礼をする。
「川神は強いんだな。時間制限がなければ負けていた」
「いえ、貴女も十分に強かった。できればまた手合わせをお願いし

たいところです」
　握手をしお互いの健闘を称える両者。ここだけ切り取れば青春の一幕ですむけれど、先程までの光景は異様だった。義姉と瀬麗武さんの手合わせも凄いのだけれど、川神先輩の力が上手な所為だろう。
「うー、くそう。不完全燃焼だし、おっぱいも揉めない……」
　しょぼくれながらこちらへ戻る川神先輩に笑みを浮かべたエリカさんが良美さんの手を掴んで前に立った。
「あらあ、残念ねえ。勿体ないことをしたものね、このよっぴーのバスト八十九を揉めないだなんて」
　彼女持ち前のＳっ気が発現したようで、文句を言っていた川神先輩を煽りながら自然に良美さんの胸を堪能している。
「ちょっ！　ちょっとエリーこんな所で……！　ひゃっ！」
「むぅ……」
　エリカさんの手によって悩ましい声を上げる良美さん。この光景を見ていた男子生徒が『いいぞーもっとやってくれー！』『うらやましい、けしからん』『やっべチ○コ勃った……』等言いたい放題言っている。
　その声が聞こえたのか、更に良美さんの抗議の声が上がるのだけれど焼け石に水。というか抵抗したことによってエリカさんが気を良くしてさらに激しく手を動かすものだから、甘い声がさらに漏れてる。
「霧夜、佐藤が困っているだろう。いい加減にしておけ」
　遅れて三人に追いついた瀬麗武さんが見かねて止めに入った。騒いでいた男子たちからブーイングがひとしきり飛んでくるけれど、完全にスルーだ。
「あら、負け犬銀ちゃん」
「負けたわけではないっ！　引き分けだ……」
　エリカさんの言葉を否定しながら結局最後はしりすぼみな音量になって顔を背けていた。自信があったであろう腕前に、残念な結果となってしまったのだから当然である。
「まあ彼女のおっぱいを堪能できなかったことは残念だけれど、い

いものを見せてもらったわ」
川神は楽しい街ねと笑いながら移動して学長やルー先生に川神先輩それぞれに声を掛けて、名刺を渡しているエリカさん。確かに多馬大橋での毎日の珍事やこの騒がしい学園は、普通の街では体験できないのだろう。
「樹希っ！」
「はい？」
「下手に自分を押さえ込んで、己の可能性を潰すような真似はやめなさいって前から言っているでしょう？」
以前にも彼女に同じ台詞を言われたことがある。強いのにその力を発揮しなくてどうするのだ、と。強すぎる力は異端である。周囲からのあの視線はけっこうキツイものがある。それを話すと一笑に付された。先程言われた通り、そんなものを気にしてどうするのだ、と。
「ま、本人が気づくべきことだから私が気に掛けることでもないわね。それじゃあ戻りましょうか二人とも。ダスヴィダーニャ！　諸君！」
最初はタイ語で最後はロシア語。本当、色々な意味で忙しい人だ。エリカさんは私の様子を見にきたというよりも、乙女義姉さんとの約束を果たしに来たという方が大きいのだろう。
エリカさんの性格は熟知しているつもりである。つまらない人間にならそんな台詞すら言わない人で、路傍の石くらいにしか思っていない。こうして声をかけてくれるのは自分と同じステージに上がってこいという応援なのだということも。
周りからの視線を恐れていてもしかたないと分かっている。中学生までは周りに溶け込むようにと、自分の力を発揮できるのは鉄の道場のみだった。けれどこの学園ならば、川神先輩のように自由にしてしまってもいいのではないのだろうかと、誘惑に狩られる。
――まだ、もう少し。
クラスにそれなりに溶け込み始め友人と呼べる人も出来たはずだ。ただ願うことならば、認められたいと欲が出てきてしまうのは当然で。仕合いも終わり、グラウンドからは人気がなくなったまま立ちす

くんでいた私の意識を呼び戻したのは、昼休み終了を告げるチャイム。

ご飯を食べ終えていないことに気付いて慌てて教室へと戻ると、クラスメイトの視線が降り注ぐし、川神さんからも興味深々顔で見られるけれど、結局五限目開始の合図が鳴り響き。残念と口にして席へと着くクラスメイトたちに苦笑が漏れ、五限目終わりの休み時間に取り囲まれ質問攻めにあいながら、この愉快な川神の人たちならば大丈夫なのかもと希望を見出し。

夜、良美さんから届いたメールに目を通すと『エリーは樹ちゃんのことを気にいっているから、あまり気にしないで』と。そして瀬麗武さんはエリカさんに『アレはバケモノだ』と零していたらしい。

# 第四話：変化

エリカさんが突然学園に訪れた日の夜。夕食を終えて自由時間となっている寮内は随分と静かだった。

学園を巻き込んだ大騒ぎな昼休みの後は、クラスメイトや上級生からの視線を感じつつ授業を受け、川神さんの無邪気な質問に答えると周りのみんなは聞き耳を立てていたようで。あの人知を超えている異次元の手合わせを見て、なんとも思わないどころか楽しんでいる節のある川神学園の生徒には驚きを隠せなかった。

宿題を済ませてしまおうと自室で机に向かっていた時、唐突に鳴り響いた電子音に意識を中断されて携帯を手に取り開くと、そこには『佐藤良美』の文字が。

昼休みに何の連絡もなく学園へと赴いたことと騒ぎを起こしてしまった事の謝罪が丁寧な文字で綴られていた。良美さんは律義だなあと、ほっこりしつつお礼の言葉と『気にしないでください』とメールを返す。そうしてまた幾分かの時間が経つとまた電子音が鳴り、また携帯を開くとメール一件の文字が。

『何かが変わるといいね』

との言葉とエリカさんは私を気に入っているから、昼休みの最後に掛けられた声は期待の表れで、あまり気にしないで欲しいと。心配を掛けてばかりであることに少し心苦しさを覚えて、もう一度返信を返すとそれ以降は電子音が部屋に鳴り響くことはなく。

忙しい人たちだからまだ仕事をしているのかもしれないのだろうと、もう一度机に向き直り宿題を捌くこと暫く。ようやく終わったと背を伸ばし、首を左右に回して肩のコリを軽くする。お風呂の時間になる前に、日課の座禅を済ませておくかとストレッチマットを部屋の片隅へと敷きあぐらを組む。

これは力加減が上手くできなかった小学校高学年の頃に義姉が教えてくれたもので『気』を操作するというものだ。己に義姉のような気の量があると実感できないけれど、義姉曰く私には随分と多い気の量が備わっているそうで、それが本人の意思に関わらず体内で活性化

された骨や筋肉果ては神経までもが異常な力を発揮し、余った気は体外へ放出されていると。

私が無駄に周りから恐れられているのは、ソレが原因であろうと助言してくれたのだ。それからはずっと体内へと気を循環させることを意識しながら、必要以上に気が漏れださないことに気を配りながら生活するようになると随分とマシになり、全く友人がいなかった小学生時代とは変わり中学にあがると少なからず友人と呼べる人が出来た。

腹に力を入れ背筋を伸ばし深い息を長く長く吐き出し全てを肺から出し切り息を止め。腹の力を抜き、ゆっくりゆっくりと新たな空気を鼻から取り込む。何度も同じことを繰り返して気を体内へ循環させ、活性化させる。普通の人であればこれはただのリラックスの為の呼吸法で終わってしまうらしいが、気の量が多い人はこうして肉体の活性化に繋げるそうで。この座禅兼呼吸法をやり始めてからは、髪が伸びるのが早くなったりやたらとお腹が減ったりと効果は感じている。

義姉ほどの大食漢ではないけれど、同年代の同性と比べると随分と多い量を食べているのだけれどまったく太らない。筋トレや走り込みをしているからカロリー消費は多いはずだけれど、食べる量は上回っている筈なのだけれど。人体の不思議を感じつつ、今日の日課を終えるとTシャツに張り付く汗が凄い。いつもなら着替えてしまうけれど、もう風呂の時間だからこのまま部屋を出て浴室へと向かう方が良いだろうと部屋を出る。

「すごい汗だね、鉄さん」

「あ、すみません。みっともない所をお見せして」

部屋を出た瞬間隣室の一つ上の学年の人と視線が合った。汗だくの私を見て苦笑いをしながらお風呂セットを抱えている彼女と一緒に風呂へと向かう。

何人かの寮生が居て風呂は賑わっていた。女子生徒だけが入寮できるので、こういう所はかなり大らか。結局今日一番のイベントであったエリカさんたちの話題が振られ、質問にまた答える羽目になる

けれど裸の付き合いも大切だろうと、答えても大丈夫な所だけを口にする。
風呂から上がりしばらくすれば消灯時間が訪れ。
――おやすみなさい。
布団に入り目を閉じればすぐに夢の中へと旅立ち朝が即座に訪れた。
「走り込みに行ってきます」
「ん。気を付けて行ってきなさいね」
台所で寮生用の朝食を作っている寮母さんに声が大きくなり過ぎないようにと気を付けながら声を掛け、玄関へと向かい靴ひもをぎゅっと締め外に出る。朝の早い時間帯、靄の掛かった街並みは幻想的で。そんな中を一人住宅街を走り抜けて河川敷を目指す。
「あーおはよー！」
「おはよう。川神さん、何時も早いね」
それはお互いさまじゃないと無邪気な笑顔を浮かべこちらへと近づいてくる川神さん。いつもならば通りすがるだけなのだけれど、一体どうしたのか。
「鉄さん、お姉さまが話があるから昼休みに顔を出すって言っていたわ！」
「川神先輩が？」
彼女のお姉さまは武神と呼ばれて名高い川神百代その人である。昨日の事で聞きたい事でもあるのだろうとアタリを付け、川神さんに了解と返すと突然に構えを取る彼女の姿が視界に入る。
「せいっ！」
「っと」
「おお、かわされたっ！　えへへっ、お姉さまの言う通りだわっ！」
「ん？」
不意打ちの右ストレートはかなりの速度が出ていた。ただ分かりやすい軌道で避けるのも安易だったし、川神さんも本気ではなく試し打ちだったのだろう。
「昨日の手合わせで面白いヤツを見つけたって言っていたの」

「それが私？」
「ええ、そうよっ！　――いつか貴女と勝負したいわっ！」
びしっと私を指差す川神さんの表情は期待をありありと浮かべて、なにかうずうずしているような。
目の前に立って上目遣いで私を見る彼女に、犬の耳と尻尾を幻視する。
「勝負もいいけれど、こっちに引っ越してから日常的に手合わせできる人が居なくて、もしよければ川神さん相手になってくれないかな？」
「お？」
「ああ、でも川神さんって川神流なんだよね……。流派が違うから不味いのかな？」
ちなみに義姉や義祖父に教わっていた鉄流は、他流派との交流を禁止していないしむしろ歓迎している。だからこそ瀬麗武さんとの手合わせをしていたし、こうして川神さんにお願いすることも禁止されていない。ただ、武道の総本山といわれる川神流がどういった教えと考えを持っているのか、全く情報がないので確認する必要があった。
「そんなことはないわっ！　むしろ私からもお願いしたいものっ!!
練習相手が京くらいだから嬉しいわ！」
知らない名前に疑問符を浮かべるけれど、社交的な川神さんの事だから手合わせ仲間がいるのだろうと深く考えることを止める。
「習い始めて三年弱だから、あまり期待はしないでね」
習い始めたのは中学生になってからで、基礎を習得し義姉たちとまともに拳を合わせるようになったのはここ最近。
幼い頃から川神流を習っていたであろう川神さんには敵わないかもしれないが、この際だ遠慮なく手合わせできるのならば嬉しいことである。時間が勿体ないので二人並んで走りながら、これからのことを話し合って時間だからと別れて、寮へと戻り持参するお弁当を手早く作り朝食を食べ学園を目指す。
「ふはははははっ！」
「今日も素敵です英雄さまーー！」

多馬大橋に差し掛かると自転車並みのスピードで過ぎ去っていく人力車。公道を人力車が走って良いものかどうかは謎であるが、下手をすれば車よりも勢いがある。そういえば入学式の日にも先程の人力車を見たなあと思い出し、川神学園の生徒だった事実にあんな学生が存在するのかと衝撃を受けた。

少し前を歩く川神学園生三人組はひとりは幼稚園か保育園へと向かう児童を眺めながら手を合わせ感涙の涙を流しているし、銀髪の女の子は蝶々を追いかけて橋の欄干を超えようとしている。一緒に居た男子が流石に止めに入ったが、随分とフリーダムだ。愉快な人が多いなあと苦笑しながら学園へと辿り着きクラスへと向かう。

「おはよう、ってさっきも言ったわね」

教室へと入ると既に登校していた川神さんに声を掛けられた。出席番号順で決められている席は川神さんが私の前の席となる。通学鞄をゆっくりと机に置き『おはよう』と返して、鞄の中身を出し机の中へと仕舞い込む。そんなこんなでホームルームを終え授業が始まれば四限目の終了は直ぐで、昼休みに突入する。

「邪魔するぞー」

昼休み突入から五分と掛からず件の人がやって来た。制服を着崩し上着を羽織っているのは何故なのだろうか。よく落ちないなと感心しながらこちらへとやってくる川神先輩を見て、朝に川神さんから聞いていた言葉を思い出し客人ならばと席を立つ。

「あ、お姉さまっ！」

川神さんが素早く駆け寄って腕に手を回すと、先輩が川神さんの頭を撫でる。仲の良い姉妹でいいことだと頬が緩む。

「お前、面白いよな」

「へ」

教室へと入り顔を付き合わせたばかりのタイミングで、脈絡もない川神先輩の一言に間抜けな声が漏れる。はて、この人に面白がられるようなことをした覚えなんてないんだけれどと、記憶を掘り返してみるけれど接点がないのだし、彼女の言葉は本当に不思議なものだ。

「昨日の橘さんとの仕合いの時、気が駄々洩れていたぞ」

「……それは、お恥ずかしい所をお見せしてしまい、申し訳ありません」
昨日のあの攻防は胸躍るものだった。どうやら興奮していて体内に内循させていた気が外へと漏れ出していたようで。
まだまだ未熟者だよなあと反省しつつ、指摘してくれた川神先輩には感謝するけれど、よくあの激しい仕合いの最中こちらへと意識を向けることが出来ていたことに驚きを隠せない。瀬麗武さんもかなりの手練れだというのに。
「いや、そんなことはどうでもいいんだ。――私と試合でも決闘でも何でもいい。勝負しないか？」
ぐっと顔を近づけ私に迫る川神先輩。腕に絡んでいる川神さんが驚いているけれど、どうしたものか。勿論、手合わせや仕合いというのならば歓迎である。強い人と拳を交えるのはなによりも楽しいし、いつからか心のどこかで芽生えていた乙女義姉さんを超えたいという願いもある。目の前の人はかなりの手練れで、今の私では敵うことのない人であるが胸を借りたい気持ちが大きい。
「試合や手合わせという形ならお願いしたいのですが、私はまだ武道を習い始めて三年の未熟者。昨日の瀬麗武さんのような仕合いにはならないですよ？」
それでもいいのかという視線を向けると、嬉しそうにニヤっと口を伸ばして笑う先輩に少し危ないものを感じ取る。
「謙遜するのは止めろ。あの気の量は昨日の彼女を超えていた。弱いはずがないんだよ、お前は」
ただの笑みから獰猛なものに変わり、私の肩を掴む先輩の力はかなり強いもので。
「痛がる素振りを見せない時点で、実力者だろう？」
引き下がる気配のない先輩に、少々困る。手合わせをすること自体は、むしろこちらから願い出たいくらいなのだけれど、私が強いというのは彼女の盛大な勘違いである。気の量が多くても、結局手練れの人には敵わないのは事実なのだ。経験の差で負けるのは何度も経験しているし、義姉さんからも『気の量が多いからといっておごらない

こと』と忠告を受けているのだし。
「実力はほどほどです。取り合えず、軽くどこかでお手合わせをしませんか？　そこから判断するのも悪くは無いでしょう？」
取り合えず落ち着いて欲しいと掴まれていた肩から手を離してもらい、交渉へと持っていくと何故かご機嫌な様子の川神先輩。義姉や義祖父と違い、随分と飢えている人だ。手練れの武芸者ならばもう少し落ち着いていてもよさそうなものだけれど、彼女はまだ若いから仕方ないのかも知れない。
そうこうやり取りをするうちに、放課後に川神院で手合わせをすることになる。
学園であまり目立ちたくはないので、人目に付かない所かどこかの道場を借りて行いたいと願い出ると、先輩が『ならウチでやろうっ！』と言ってくれたのだ。
武道の総本山といわれる川神院へと足を踏み入れることになったのは意外だったが、少し楽しみでもある。観光地としても有名だから一度訪れたいとは思っていたのだけれど、引っ越しやら始まった授業やらで忙しかった。
「それじゃあ、放課後になー」
軽い声を上げて立ち去る川神先輩の背中には闘士が宿っており。不味い仕合いは出来ないなあと遠い目になる。
「いいなあ、お姉さまと手合わせなんて」
「稽古、つけて貰えばいいじゃない？」
「んー、みんながお姉さまとはまだ早いって言うんだもの。もっと強くならなきゃ！」
ふんと握りこぶしを作り気合を入れ広げたお弁当を食べ始める川神さんを微笑ましく眺めながら自分も箸を進め、放課後彼女の案内で川神院へと向かうのだった。

# 第五話：仕合い

沈んでいた意識が浮上する。

「……」

目に映った光景はこの数週間で馴染んだ寮の自室の天井とは違う格天井で。随分と凝った造りだなあと感心しつつ、布団から上半身を離してきょろきょろと周りを確認する。真新しい畳の匂いと、お日様の匂いを微かに携えた布団。床の間には立派な掛け軸と一輪挿しの花瓶にひなげしの花が生けられており。清潔感溢れる広い和室の真ん中にぽつんと私が一人居る。

「ああ、目が覚めたんだネ」

「ルー先生……ここは？」

障子張りの引き戸をゆっくりと引いて立っていたのは、川神学園の体育教師のルー先生だった。感情をうかがえない細い目にどうしたものかと、少し困っていると彼の方から口を開く。

「気分は悪くはないかイ？　倒れた前後のコト、覚えているかナ？」

その言葉で一気に記憶が蘇える。ああ、そうだ。川神先輩と手合わせをすることになって放課後に川神院を訪れ、待ってましたと言わんばかりの彼女と対決したのだった。

ルー先生の言葉は私が倒れた時に記憶障害になっていないか、なにか体調に変化はないかの確認を兼ねているのだろう。彼は見守り役として手合わせの間同伴していたのだから、きっちりと話すべきかと布団から畳へと移動して居直り、思い出しながら口を開くのだった。

◇

放課後。六限目の授業を終えると、そそくさと帰る用意をし席を立つ。こういう時は帰宅部って便利だよねえと、部活動へと急ぐ人たちと一緒に教室を出て廊下を歩く。どうやら川神先輩と手合わせをすることは噂で広まっているようで、視線を浴びること浴びること。強いと有名な人だから致し方ないとして、私は先輩に勝てるのだろうか。ぶっちゃけ勝ち負けよりも楽しい手合わせになれば、それでいい。

朝来た道をまた通り寮へと戻って、寮母さんに帰宅の挨拶をしてから自室へと入って洗濯したばかりのジャージを取り出しリュックサックに詰め込む。本当ならば道着を身に纏うべきなのだろうけれど、生憎と私は鉄流の門下生という訳でもない。趣味で義姉たちと手合わせをしていただけの素人に毛が生えた程度。

「よし」

とはいえやはり強い人と手合わせをするとなれば心躍るのは、義姉たちとの手合わせが楽しかった。それだけにすぎない。周囲の目はまだ気にはなるけれど、あの時間は楽しいのだから。そうしてまた寮母さんに出かけてくると言い残して、寮を出て走る。

――川神院って何処だっけ……。

こちらに越してきてあまり地理に慣れていなかったことをすっかりと忘れていた。たしかこの近くに交番があったなあと思い出し、進路をそちらへと向ける。在中している警察官の人に声を掛けると、川神院を知らないなんて珍しいと苦笑された。無知ですみませんとと心の中で謝りつつ、丁寧に道を教えてくれたことにお礼を述べて、また走り出す。

四月の末。心地いい空気が肺を満たし、道端に咲く草花に目をやりながら川神院を目指しているとようやく『仲見世通り』へと辿り着く。観光客の人たちが多く行き交うこの通りを走り抜けるのは迷惑だと判断して、スピードを落とした。道を挟んで並び建つ店は多くの名産品を売っていて見るだけでも、時間が随分と経ってしまいそう。流石に約束があるので立ち寄ったりはしないけれど、今度時間がある時にまた訪れようと決めた。その一本道を抜けた先、関東三山の一つ『川神院』が見えてくる。観光客に混じり立派な山門を潜り抜けて目の前に見える本堂へときょろきょろとしながら歩いていると、名前を呼ばれてそちらへと向く。

「来たか」

軽く片手を上げて目を細めて笑った制服姿の川神先輩が。

「川神先輩、今日はよろしくお願いします」

「ああ。――こっちだ、ついてこい」

挨拶も早々に踵を返し歩き始める先輩。学園の時との彼女が纏う空気の重みが違うことに気付き、ごくりと喉を鳴らす。玉石砂利を踏みしめる音を二人分響かせながら、本堂とは別の場所へと案内され、立派な五重塔が建立された少し開けた広場へと着くと川神院のお弟子さんたちなのか、揃いの道着を纏った人たちが何人かこちらへと視線を向けてくる。

「あまり見学者は居ない方がいいんだろうが、私と手合わせをするヤツがいると耳聡い連中がいてなあ」

先輩がむうと唸りながらそう言うものの、場所柄的に仕方ないのだろう。取り合えず着替えたい旨を伝えると、更衣室を借りることができた。

着替え終えて先程の場所へと戻ると学長とルー先生の姿が。学長が川神院の総代を務めていることは風の噂で知っていたけれど、体育教師であるルー先生が川神院で師範代も務めているとは。人って見かけによらないものだと感心しながら、手合わせの準備が進められていたようで、簡単なルール説明をルー師範代が行ってくれたのだった。

「今回は軽い手合わせだからネ。双方、あまり熱くならないように」

そう言いつつもルー師範代と総代の視線は川神先輩に向けられており、それを察知したのかつまらなそうな顔で『わかったよ、ちぇ』と愚痴る先輩。

失礼かもしれないがそんな姿を見ると武道を究めている人の様に思えないし、年相応だよなあと感じてしまう。入念に準備体操をしていると一人見知った姿を見つけると、その人はにっこりと笑いこちらへと駆けてきた。

「お姉さまは強いわよ。頑張ってね鉄さん」

「うん、先輩の強さは昨日見たから。恥をかかない程度に頑張らないとね」

川神先輩が強いことは百も承知だけれど、義姉や義祖父たちに教えを乞うてきた手前もあるのであまり無様な姿は見せられない。

あまり邪魔をしては悪いからとトレードマークのポニーテールを

揺らしながら川神さんは離れた位置へと戻っていく。ようやく体があったまってきたなと準備運動を終えると、それを待っていたかのように川神先輩や学長にルー師範代がこちらへとやってくる。
「楽しみだ、よろしくな」
「よろしくお願いします」
「それじゃあ始めるヨ」
その言葉にこくりと先輩と私が頷いて。すうとルー師範代が息を吸い込み数舜。
「レディーファッイ!!」
気合の号砲が院内へと鳴り響く。
「はっ！」
開始の合図とほぼ同時、軸足に力を込めて川神先輩との距離を一気に詰め込んで体を捻り腰から腕へと力を伝えた右ストレートを打ち込む。
「軽いなあ」
牽制というよりも様子見の一発と距離感を掴む為のものだったので、軽くあしらわれる。そうして間髪入れずに打ち込むけれど、どれも防がれて有効打には至っていない。
川神先輩の強打には気を付けるべきだけれど、彼女の体に張り付いて有効打撃範囲に入らない、もしくは射程圏外となる外角へと逃げればいい。ただこんな小手先が通じるような相手ではないのは百も承知なので、私の策も直ぐに見破られてしまいそうだ。
「ぬあー、張り付くなっ！　うっとおしいっ！」
暫く張り付いたまま攻防をしていた所為なのか唐突に声を出して、大振りな左を繰り出す川神先輩。流石にそれをもらう訳にはいかないと避けようとした瞬間、尋常ではない速さの拳が目の前に迫る。
「ぐっ!!」
義姉の本気の一発より重いソレに驚きながらも、間一髪で間に合った防御。地面に靴の跡を何メートルも描きながら、防いだ腕がジンジンと痛みを訴えており、マトモに受けるものではないと警鐘が鳴る。
「お、防いだのか。――へぇ。ならもう一段階上げるな」

きょとんと意外なものを見るかような顔をした川神先輩が直ぐに表情を変え不敵なものになる。
「モモの悪い癖が出とるのう」
「ですネ。何もなければいいのですガ」
不穏な声を聴きながら、一足飛びで距離を詰める先輩の姿が目の前に迫る。真正面にくるストレートの威力はきっと破城槌のごと。いや、先輩の方が上回っていそうだなあと打開策を考えるけれど、そんなものは早々に浮かぶはずもなく。
「川神流――無双正拳突きぃ！」
気合の声が響くと同時、ヤケクソに合わせた私の右ストレートが先輩の左頬へと奇麗に決まるが、彼女の正拳突きの余波でこちらの頬が切れているのだけれども。末恐ろしい人である。
「ああ、やっぱ、目を付けただけあるなあ」
にいと歪に伸びる口元と彼女が纏う気がゆらりと嫌な揺れ方をして。試されているとわかる拳打と足技を防戦一方のまま幾度か交わすと、一旦先輩が距離を取ったその瞬間。
――消えた。
視界に捉えることはなく、痛みだけを右頬に感じて。世の中、強い人はごまんと居るのだなあと、己の小学生時代が記憶が走馬灯のように流れながら、地面へと倒れ込み意識を失うのだった。
◇
「それだけ覚えているなら大丈夫ダネ」
私の傷を見ながらルー先生が細い目を更に細くして笑う。ああ、もう本当子供の頃に周囲から畏怖されていたのはなんだったのだろうと、馬鹿馬鹿しくなる。義姉や瀬麗武さんより強い人が居るだなんて知らなかったのだから、本当世界は広いものだ。
「モモヨが済まないネエ」
「いえ、まだまだ自分の未熟振りを痛感させられました」
こちらへと居を変える前、義姉との手合わせは少し物足りないものになっていたというのに。これ以上強い人などいないだろうと決めつけるものではないなと、反省しつつルー先生と少し話をする。

川神先輩は己の強さを自覚し、自分と張り合える人をいつも探し求めているそうで、今回その悪い癖が出てしまったと。手合わせならば相手を気絶させることなどはない。お互いの実力を確かめ合いながら、色々と試行錯誤するのが本来のソレだというのに、と。

ただ今日は川神先輩に挑戦する武芸者より長く持ったそうで、川神先輩がタガを外してしまった原因だそうだ。嬉しい言葉であるけれど、まだまだなのだと思う。川神先輩と義姉が手合わせしていれば、ある程度の勝敗が決まるまでもっと時間が掛かっただろうし、義姉であればもっと上手く彼女の攻撃を捌いたはずだ。

「モモっ、さっさとこっちに来るんじゃ！」

「痛いな、ジジイ！　わかってるから離せよっ！」

どたばたと縁側を歩く音が聞こえると先生と顔を見合わせて苦笑する。そうこうする内に障子の影に二人分の姿が映ると引き戸が開くと、学長と川神先輩がこちらへとやってきてゆっくりと座り対面したのだった。

「モモがすまんのう。お前さんを気絶させてしもうて」

「いえ。ルー先生にも言いましたが、己の未熟さが招いた結果ですので」

武道を習っているのならば怪我や気絶は日常茶飯事である。練習や訓練を重ねて回数は減っていくけれど、強者と当たればこういうこともあるだろうから、恨み言をいうのは筋違いだ。

「ほらー、鉄もそう言ってるじゃないかー。なんで謝らないといけないんだ」

あぐらを組んでぷいと視線を逸らす先輩に、ぱしんと良い音を響かせた学長のゲンコツが先輩の頭に落ちた。

「いてっ！」

「痛くしたんじゃ、馬鹿もんが。ほら、謝らんかい」

「――悪かった。ちょっと本気を出してしまったんだ、許せ」

あれで少しだけというのが末恐ろしいけれど、ある意味川神先輩の本気を少し引き出せたというのなら誇るべきなのか。

「いえ。手合わせをお願いしたのは私ですので、あまり気にしない

でください」
畳の上で正座をしたまま頭を下げた。
「ほら見ろジジイ。謝る必要なんて無かったじゃないかー！」
終わる気配を見せようとしない孫と祖父の罵り合い。どっちもどっちのような気がするのは気のせいだろうかと遠い目になり、ルー先生に視線を向けると、彼が小さく息を吐く。
「二人とも鉄サンが見てるヨー」
「ん、おお、すまんの。孫の口が悪くてのう、ついこうなってしまうんじゃ」
うるせージジイという川神先輩の暴言は聞こえないふりをして、学長からの謝罪も受け取る。手当は済んでいるし傷は軽いもの。気を使って一晩寝れば奇麗に治るけれど、自然治癒が一番いいのであまり使わない。治そうとすればすぐ直ることに少し後ろめたさを感じつつ、学長が義祖父の話を持ち出したのだった。
「陣内殿は元気かの？」
「相変わらずです。ここの入学祝いと称して世界の龍穴巡りを三日ほどで強行しましたから……」
私の目のハイライトが消えていくのが分かる。ハイテンションの義祖父に連れられて、世界に四十八か所あるという龍穴を二日間という強行スケジュールを組み、見事達成してしまうのだから。
「……普通に空中を超音速で駆け回っていますからねえ」
「ふぉふぉふぉ。変わりないようじゃのう、元気そうでなにより」
「お？　なんだソレ！　私も行きたいぞっ!!」
連れていけジジイと嬉しそうに語りかける先輩にゲンナリとした顔の学長。
「ワシは無理じゃぞ。忙しいからのう」
忙しくなければ行けるということで良いのだろうか。義祖父も末恐ろしい人であるが、目の前で好々爺然として座っているこの御仁も義祖父と変わらないほどの実力者なのだろうか。
そうは見えないけれど、能ある鷹は爪を隠すというように己の内に秘めているのだろう。川神先輩を諌められる力は持っていないと、言

うこと聞いてくれそうにないし。
「夏休みにでも義祖父に頼めば可能かもしれません、先輩」
頼めば連れて行ってくれるはずだ。アウトローでアウトドアな人だし。
「何っ!?　いいのかっ!!」
「まだ義祖父に話していないので、不透明ですが……」
「かまわんぞっ！　むしろ夏休みと言わずいまからでも構わないんだが」
そわそわというように前のめりになりながら私に顔を近づける先輩。こういうところは姉妹だけあって川神さんと似ている。そんな姿を見つつ、確認を取って返事をしますねと苦笑い。
「あの、お願いがあるのですが……」
「孫が迷惑を掛けたんじゃし、無理難題でないならかまわんぞい」
学長の言葉にありがとうございますと返して、川神先輩へと向き直る。
「川神先輩、今日はありがとうございました。――門下生でもないので不躾なのは百も承知ですが、お手すきの時間だけで良いので稽古をつけて頂けませんか？」
「お？」
「うん？」
「おお！」
三者三様の言葉を漏らして、驚いたような顔を見せる三人。そんなに以外だったのだろうかと感じつつ、先輩の目をじっと見る。
「えー、メンド――」
「――構わんよ」
川神先輩の言葉を遮ったのは学長で、その言葉に驚いた顔をする彼女は少し不機嫌である。
「はあ？　ジジイ勝手に話を決めるなよっ！」
「いい機会じゃよ。彼女なら才能もあるじゃろうし、なによりモモとまともに組めるんじゃ。それに将来の川神院を背負うなら、モモに教え子の一人や二人いても遅くはあるまいて」

どうやら川神院最高責任者の言葉には川神先輩も逆らえないようで。これから時々稽古をつけてもらうことになったのである。